コッツウォルズ
全4回シリーズ
第4弾

## 素朴な景観を残す村

# Castle Combe

## カッスルクーム

**人口 350 人程度の小さな村カッスルクーム。15 世紀からほとんど変わらない素朴な街並みで人々を優しく迎える。**

村の中心、マーケット・プレイス。屋根付きのモニュメントは「マーケット・クロス」と呼ばれ、村のシンボル的存在。写真手前は、かつてマーケット・ホールがあったことを示す「バター・クロス」。

村の毛織物産業を支えたバイブルック川から眺めるメイン・ストリート「ザ・ストリート」。

メイン・ストリートにあるティールーム「The Old Rectory Tearoom」。アットホームな飾りつけが村の雰囲気によくなじむ。

「城（castle）のある深い峡谷（クームcombe）」を意味するカッスルクーム。もともとは丘に囲まれた村の地形にちなみ「クーム」と呼ばれていたが、12世紀半ばに防衛のための城が建てられたことから、この名が定着した（城は現存しない）。村の北東部に車を停め、生い茂る木々に囲まれた緩やかな下り坂を歩くと、はちみつ色のライムストーンが特徴的な家々が建ち並ぶ三叉路にたどり着く。ここが村の中心「マーケット・プレイス」だ。メイン・ストリートとなる「ザ・ストリート」が弧を描くように伸びているが、パブを除いては際立った商業施設が見当たらない。村の中心地にしては控えめで、落ち着いた印象だ。

現在に残る街並みが形成されたのは15世紀、羊毛産業が全盛期を迎えた頃のこと。村を流れるバイブルック川沿いに織工たちのための住居兼作業場「ウィーバーズ・コテージ」が築かれ、豊かな水の恩恵を受けて、生産が進められた。村の自慢は、赤色と白色からなる毛織物「Castle Combe Cloth」。兵士用のユニフォームとして使われ、ブリストルやサイレンセスターで開かれていた大規模な布マーケットで取引されたほか、遠くはロンドンにまで運ば

**動画へGo!**

週刊ジャーニー編集部では、カッスルクームを題材に3分半ほどのショートフィルムを制作しました。下のQRコードを読み込むか、YouTubeまたはGoogleで「英国ぶら歩きカッスルクーム」と検索して、ぜひご覧ください。

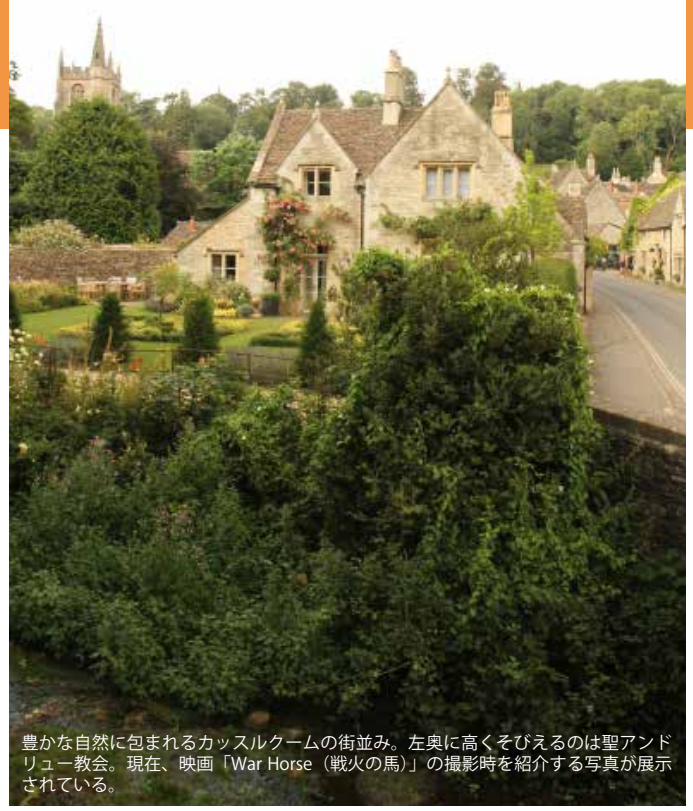
信頼で成り立つ（run on trust）無人販売所。手作りのケーキやジャム、はちみつなどのほか、18、19世紀の街並みを捉えたモノクロ写真が販売されている。購入の際は、玄関ドアの郵便受けに代金を入れるのをお忘れなく。

マーケット・クロスの脇にある古びたポンプ。ハンドル部分がなく機能していないものの、そのままの形で残されている。

れるほど需要を高めたという。確かな技術で織られる「Castle Combe Cloth」によって村の経済が潤うと、やがて週に1回、市が開かれるようになる。地元の小作人が野菜やチーズを地面に並べ、財力のある商人は屋台を設けて農作物を販売。遠方からは裕福な業者も参加して商売が行われ、商人らの威勢のよい声が村中に響いたという。

ところが干ばつによる川の水位の低下が産業に影を落とし始める。その後は、コッツウォルズのほかの村々がたどった歴史と同じように、産業革命の波に呑まれてしまう。

「そのおかげで」と言うと当時の村人に申し訳ない気もするが、時代の流れから取り残された結果、現在、中世の面影が漂うこの村にはかつての喧騒とは対照的に素朴で落ち着いた雰囲気が漂い、国内外の観光客を魅了している。好景気に沸き商売人を惹きつけた村が、今では静寂さによって人々の心を捉えていることを思うと移り変わる時代の面白さを感じずにはいられない。ひっそりと歴史を歩むこの村へと散策に出かけてみてはいかがだろうか。



豊かな自然に包まれるカッスルクームの街並み。左奥に高くそびえるのは聖アンドリュー教会。現在、映画「War Horse（戦火の馬）」の撮影時を紹介する写真が展示されている。

バイブルック川沿いに建ち並ぶ「ウィーバーズ・コテージ（The Weavers' Cottages）」。羊毛が栄えた時代、織工の住居兼作業場として建てられた。寝具として用いられる「ブランケット」の語源となったとされるブランケット兄弟もここで暮らし、川沿いの湿気からくる寒さをしのぐため、羊毛で大きな生地を作ったと言い伝えられている。

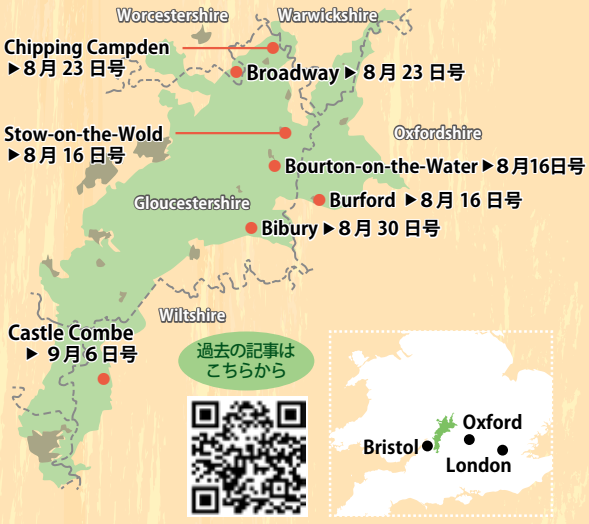
スピルバーグ作品にも登場！

## War Horse

数々の映画のロケ地となってきたカッスルクーム。最近では、ジェレミー・アーヴァイン、エミリー・ワトソンのほか、ベネディクト・カンバーバッチも出演する2011年公開のスピルバーグ監督作品「War Horse（戦火の馬）」の撮影で話題となった。アスファルト舗装された通りには土が敷かれ、建物の外観を煤けさせるなどして第一次世界大戦前が再現されているが、登場人物の衣装を除けば今と変わらない雰囲気。たとえば下のシーンは、12、13ページ中央の写真と同じ場所で撮影されたもの。予告編でも確認できるので、要チェック！

映画の予告編はこちらから

▲「War Horse」
軍に徴用され、戦争の最前線に送られた馬と飼い主の青年の友情を描いた感動の物語。農夫の息子アルバートの深い愛情を受けて育った馬ジョーイが、軍隊に売られてしまい…。
DVD 7ポンド
www.amazon.co.uk




## Travel Information 2018 年 9 月 3 日現在

**■ ロンドンから車**

M4 を西へ進み、ジャンクション 17 で Chippenham/Cirencester 方面の A350/A429 に出て、A350 を進み B4039 に入る。所要約 2 時間。

**■ ロンドンから公共交通**

London Paddington 駅から電車 Chippenham 駅まで行き（所要 1 時間 40 分程度）、バス 35 に乗りかえておよそ 20 分で到着する。

ミシュラン・レストランを有する

## The Manor House Hotel

村をなんとなく散策しているだけでは気づきにくい、隠れ家的な場所がこのホテル「The Manor House Hotel」。ゴルフ場を有するこの 5 つ星ホテルは、14 世紀に村の領主の屋敷として建てられた後、1947 年に最後の領主が屋敷と敷地を手放したことにより、ホテルとしての道を歩み始めた。

目印となるのは、バイブルック川に架かる橋の近くに佇む看板。その先の正門を進むと総面積 365 エーカー（東京ドームのおよそ 32 個分！）を誇る敷地の一部が目の前に現れ、素朴な村とは一味違った、豪奢な雰囲気に圧倒される。

客室は、蔦が這う趣深い本館と、別館となるコテージに分かれ、全 48 室それぞれ異なるスタイルで彩られている。館内にはミシュラン 1 つ星に輝くレストラン「The Bybrook」があるので、宿泊しなくとも、食事やアフタヌーン・ティーを堪能して庭園を散策してみれば、思い出に残るカッスルクーム滞在となるはずだ。

**www.exclusive.co.uk/the-manor-house**

ゆったりとした時間の流れを感じさせる堂々とした本館。写真右に見える階段をのぼると、イタリア式庭園へとつながる。